

## 読売新聞 きょう（7月25日）のイチ押し

### 1面 嘱託殺人 睡眠薬を投与

医師2人による嘱託殺人事件で、難病の筋萎縮性側索硬化症（ALS）の女性患者に使われた薬物が、毒性の高い睡眠薬であることが京都府警の鑑定でわかりました。チューブで栄養を胃に入れる「胃ろう」から投与したとみられています。本紙独材です。

- ★ 睡眠薬はバルビツール酸系で、海外では自殺ほう助団体が使っています。国内で市販されていません。
- ★ 投稿サイトに容疑者の医師とみられる書き込みがあり、「安楽死に最も適した薬物」としてバルビツール酸系を挙げていました。

### 1面・社会面 大阪 最多感染149人

大阪府は、新型コロナウイルスの感染者が過去最多の149人確認されたと発表しました。これまでの最多は22日の121人でした。3日続けて100人を超えています。

- ★ 149人の内訳は、20代が最も多く82人で、30代以下が全体の83%を占めており、その割合は上昇傾向にあります。
- ★ 阪南大のクラブでは学生20人のクラスターが発生。京大では課外活動団体に所属する学生5人が感染しています。
- ★ また、西村経済産業相は、感染防止指針を守らない飲食店から感染者が発生した場合、店名を公表する方針を明らかにしました。

#### 他紙と比べて

3密、PCR、クラスター、パンデミック、社会的距離……。新型コロナウイルスの感染拡大後に登場した、印象に残る言葉を5面の特集面でまとめました。いずれも今年の「新語・流行語大賞」の候補になりそうなものです。「密」のように、もともとある言葉が、独特の使われ方をしたり、「テレワーク」のように限られた場所で使われていた言葉の使用頻度が一気に増えてたりしました。コロナ禍は、日本語の変化についても考える機会になっています。